JALPAK50
1964-2014

まだ見知らぬ空へ

今からおよそ半世紀前。日本は秋に開催された東京オリンピックを契機に、再び世界の仲間入りを果たした。同年、それまで設けられていた日本人の海外渡航制限が年1回の制限付きながらも撤廃される。遠い世界に旅立つきっかけとなったのは、日本独自のパッケージツアーの誕生だった。今回はジャルパック50年の歴史と日本を振り返ってみよう。

三枝 和＝文　Text by Izumi Saegusa

羽田に駐機し整備を受ける機体番号8005のダグラスDC-8。日の丸をつけ1960年11月から1974年5月まで世界の空を飛んだ。

今から半世紀以上前の話になる。敗戦の痛手さめやらぬ一九四〇年代終わりから五〇年代、日本人の国際舞台での活躍は、国民に活力を与えていた。代表的な人物を上げると一九四九年、水泳自由形でいくつもの世界記録を樹立し「フジヤマのトビウオ」と称された古橋広之進、同年日本人初のノーベル賞を受賞した湯川秀樹、五一年「羅生門」でヴェネチア国際映画祭グランプリを受賞した黒澤明、五二年ボクシングフライ級で日本人初の世界王者となった白井義男、五三年ミスユニバース第三位となった伊東絹子、五四年と五六年に世界卓球選手権で優勝した荻村伊智朗。五九年にはブザンソン国際指揮者コンクールで優勝した小沢征爾と続く。ここまでが

1965年4月10日、ジャルパック第一陣ヨーロッパ16日間コースが出発。

黎明期のパッケージツアーと日本

年	業界の動き	航空会社の動き	パッケージツアーの動き	海外渡航者数
1964	4月 外貨枠年間1人500米ドルで渡航自由化	6月 ルフトハンザドイツ航空東京就航	5月 主要旅行業5社共同ハワイツアー出発	127,749人
	10月 新幹線開業　東京オリンピック開催	12月 JALトラベルローン開設	7月 スイス航空、パッケージツアー「プッシュボタン」を発売	
1965		5月 日本航空北回りのロンドン、パリ線開設	1月 ジャルパック発売　2月 AMEXハワイツアー発売	158,827人
			4月 ジャルパック、第一陣ヨーロッパ出発	ジャルパック集客数2,192人
			バンナムホリデー発売	
1966	外貨枠1回500米ドルに引き上げ	11月 日本航空ニューヨーク線開設	8月 JALKIT発売　AFセシボンツアー発売	212,409人
	5月 太平洋団体包括旅行（GIT）運賃導入		AFセシボンツアー発売 LHオイローパツアー発売	ジャルパック集客数2,751人
			SKバイキングツアー発売 BAローズツアー発売	
1967		3月 日本航空世界一周線開設	3月 ジャルパック、世界一周と「ヤング・ヨーロッパ」発売	267,538人
		4月 日本航空モスクワ線開設		ジャルパック集客数4,176人
1968	太平洋15人以上の団体包括旅行	8月 日本航空バンクーバー線開設	7月 JTB、名称をルックに統一	343,542人
	（GIT）運賃導入		9月 NOE、ジェットツアー発売	ジャルパック集客数5,822人
	メキシコオリンピック開催			
1969	外貨枠700米ドルへ増額	5月 英国航空、北回りロンドン線開設	4月 JAL、旅行開発（株）を設立	492,880人
	11月 欧州線バルク運賃導入	9月 パン・アメリカン航空ニューヨーク線開設		ジャルパック集客数10,059人
		日本航空、シドニー線開設		
1970	外貨枠1000米ドルへ増額	3月 パン・アメリカン航空太平洋線にB747導入	ホールセーラー各社、ハワイ6日間を	663,467人
	1月 太平洋線バルク運賃導入　3月 大阪万博開幕	7月 日本航空B747就航	最低販売価格12万6500円で発売	ジャルパック集客数29,999人
	12月 パスポート5年間有効に	10月 日本航空グアム線開設	（前年まで30万円前後）	

※外貨持ち出し制限は1971年に3000ドルに増額され、1978年に制限枠が撤廃された。

資料／IATA、日本旅行業協会、旅行開発10年史

1964年7月。試運転で海岸沿いを走る東京モノレール。

羽田を発つ旅行客。ジャルパックのロゴ入りバッグが見える。

1965年に作成されたジャルパックのカタログ第1号。

1964年に作られた新聞広告。「ビキニを着たって平気です」が効く。

「国破れて山河あり」の時代。そして、「国破れども再び勃てり」となったのが、一九六四年一〇月に開催された東京オリンピックだった。オリンピック開催に向けて、競技施設やホテル、モノレール、首都高速道路など、様々なインフラが急ピッチに整えられていった。東海道新幹線の開通は、なんと開会式の九日前となった。

一方の「経済」を見てみよう。

敗戦後、日本の貿易は占領軍によって完全に管理されていたが、一九四七年には、部分的に民間貿易が再開され、四九年には一ドル三六〇円の固定為替レートが設定された。もちろん当時の日本に国

1970年に就航したボーイング747。同年7月より変更となった5代目の制服を着たキャビンクルーとともに。

際競争力という言葉はない。圧倒的な外貨不足のため、政府は輸出で得た貴重な外貨を国内に留めるために、国民の外貨両替を規制していた。また、国内産業を保護するために、外国資本から日本への投資も制限していた。しかし、日本経済が復興するにつれ、他の先進国から「日本も、もう一人前の国らしく、為替や貿易の規制をやめて経済を自由化するように」と勧告を受けるようになった。

一九六〇年には、貿易為替自由化計画大綱が決定され、三年後までに貿易や為替の自由化を進めるという方針が発表された。そして一九六四年四月、日本は当時「先進国クラブ」とも呼ばれたOECDに正式加盟を果たす。これにより外資の日本への投資を制限することが許されなくなり、同時にIMF一四条適用国(脆弱な経済を理由に外貨両替の制限を許される)から、国際収支が悪くなっても為替を制限することができなくなる八条適用国に移行する。日本は外国とモノやカネの移動を自由に行うことを原則とする「開放経済体制」に入っていくのである。

こうして

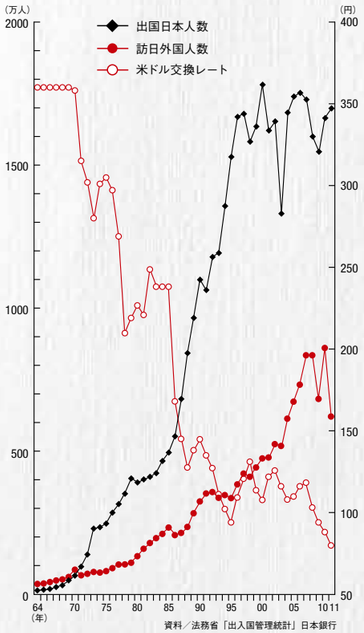
一九六四年の国家再興に向け官民が一体となり、その結実が秋の東京オリンピックとなったわけだが、同年に外国とモノやカネの移動が自由になった結果、四月には日本人の海外旅行も自由化される。それまでは、外貨の流失を防ぐため、日本人の海外渡航は政府によって規制され、業務、学問、移民などの目的がある場合にしか渡航の許可がおりなかった。つまり、日本人が単なる観光目的で海外へ行くことはできなかった。

しかし「自由化」といってもいくつかの制約があった。渡航が自由化された当初は一人年一回、外貨持ち出しは五〇〇ドルまでという制限付きだった。為替が一ドル三六〇円に固定されていた時代だから、五〇〇ドルは一八万円だ。一九六五年の大卒初任給は約二万円、都バスの運賃が二〇円という時代だから、いかに円安であったかは想像に難くない。ハワイでコーラを買う金額で、日本ではバスに四、五回は乗れただろう。また、今でこそ海外旅行に必携のクレジットカードは、前年にダイナースカードが日本でも発行を始めていたが、市民に普及するのはそれから数十年の歳月を要した。また六四年には当時のKDDとAT&T社により太平洋横断海底ケーブルが敷設され、日米の国際電話の接続が容易になったものの、ホテルの予約を個人で行うには、支払いも含めて難易度が高かった。

1978年に発売された「ジャルパック・ゼロ」のカタログ(右)と6月に出発した第1便(上)。「もっと自由な時間が欲しい」「個人で動きたい」といったニーズに応えた。

JALPAK50
1964-2014

為替相場と旅行者数の変遷



1985年の「プラザ合意」以降、為替は大きな変動を見せ始める。86年には150円台の取引も見られるようになり、同時に日本人の海外への出国も飛躍的に増加していく。

1981年に開設された「リン・リン・ダイヤル」。当初は夏休み専用の、海外旅行相談コーナーとして作られた。

ホテルや交通の手配もできない、現地の事情も分からない。そしてそもそもどれほど費用がかかるのかも分からない。そんな日本人の海外旅行にまつわる不安を徹底的に取り除く旅行商品として、「ジャルパック」が発売されたのは一九六五年一月である。航空運賃、宿泊代、現地での交通費、食事代、チップ、添乗員のガイドまで旅のすべてをセットにし、小遣いだけを持って安心して出発できる「パッケージツアー」だった。

パッケージツアーの始まりは一八四一年、イギリス人トーマス・クックが募集した禁酒運動の集会に参加するためのツアーといわれている。これは臨時列車を出し、乗客が往復運賃と食事代込みで日帰り旅行ができるよう手配したもので、パッケージツアーの原点となった。一九六四年当時、IATA（国際航空運送協会）の規定では「ツアー」とは出発日時、便名、旅程、ホテルがセットになり、不特定多数の乗客を集めるもの、と決められていたが、日本においては業務視察団のために旅程を組むという決められた人々を決められた場所に運ぶことがほとんどだった。

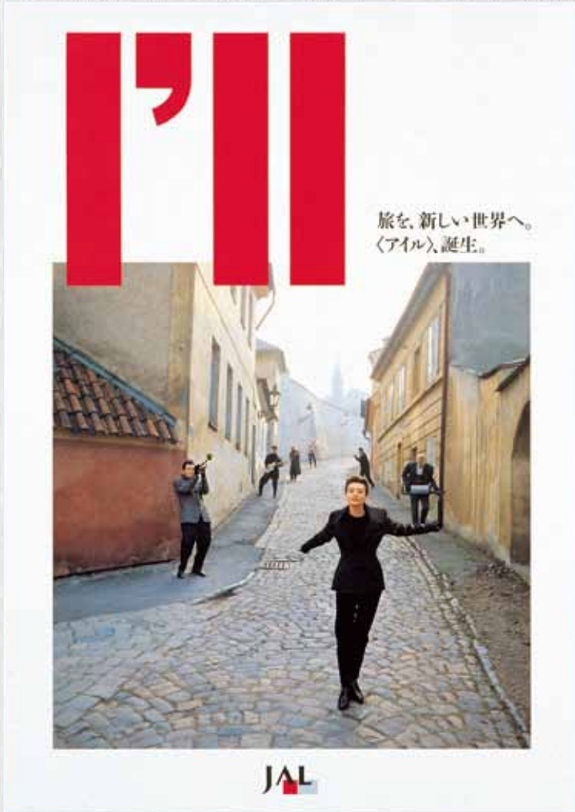
そんな中、日本航空の福岡支店には米軍基地に勤務する家族を対象とした「クリスマス・ショッピング・ツアー」の実績があり、担当者が本社に転勤となったことで情報が共有され、商品開発が進んだ。どこかに行かねばならない人のためでなく、どこかへ行くように説得する時代が始まり、日本でのパッケージツアーはジャルパックが先駆となった。

パスポートや航空券は添乗員が預かって、出入国カードも宿泊カードも書いてくれる。「JALPAK」のロゴマークが入った揃いのバッグを肩に下げ、現地では手配されたバスに乗ればホテルに到着、翌日には美術館や市内観光にも連れて行ってくれる。すでに予約済みの有名レストランでは、黙っていても人気の料理が運ばれて、ウェイターと会話をする必要もない。会計はチップを含めてすべて済ませてくれていた。もちろん、出発前には事前説明会が開かれ、現地の気候風土や見所、必要な持ち物などは教えられていた。旅行中に配られる土産物の申込書を記入すれば、羽田空港で包装された土産物を受け取ることもできたのだ。

当時の広告コピーには、「コンダクターがご案内」「日本語で行ける」「一人でも参加できる」「必要経費はぜんぶコミ」「月賦がきく」とある。人々の不安は解消され、ジャルパックは遠い海外を夢見る人々に、踏み出す勇気を与えたのである。当時の資料を見てみると、「ワイキキならビキニを着たって平気です」とのコピーが書かれた新聞広告もある。当時の人々は、それほど情報がなかったのである。

一九六五年

一月に発売された国産初の海外パッケージツアーであるジャルパックの最初の商品は「ハワイ九日間」三七万八〇〇〇円、「ヨーロッパ一六日間」六七万五〇〇〇円など計七コースだった。当時のサラリーマンの平均年収は四四万七六〇〇円と記録にはあり、かなりの高額商品であったにもかかわらず、発売一ヵ月後で予約は二〇〇〇人を突破。数ヵ月後には臨時増便を出すほどの大ヒット商品となった。



1991年に第1ブランドの「JALPAK」を改名「アイル(I'll)」と変更。斬新な広告が話題に。

1989年、25年目を迎えたジャルパックの商品。ワイキキの現モアナサーフライダー ウェスティンリゾート&スパの部屋を押さえ「部屋指定」というカテゴリを作った。

七〇年代

に入ると、海外旅行はさらに大衆化し、爆発的なブームとなる。ジャンボ機の導入によって大量輸送が可能になり、団体割引料金が導入され、ツアー価格が一気に下がったからだ。ジャルパックのハワイコースで見ると、六五年には九日間で約三八万円だったが、七〇年には六日間で約一五万円となった。ジャルパックの利用者は六九年には前年の約二倍の一万人、七〇年には約三万人と急伸した。日本全体でも六四年の自由化当初に一三万人弱だった出国者数は、七二年には一〇〇万人を超え、七七年には三〇〇万人を突破するのである。

海外旅行者が増えるにつれて、リピーターは新たな旅先を求め、旅のニーズは多様化した。流行の雑誌で情報を仕入れた若い女性を中心に「お仕着せ」のパッケージツアーを敬遠し、航空チケットとホテルの手配だけのツアーが喜ばれるようになった。また航空運賃の引き下げがツアーの価格競争を加速した。

一九八五年九月。G5（先進五ヵ国蔵相・中央銀行総裁会議）、通称プラザ合意発表の翌日、為替レートは一ドル二三五円から約二〇円下落した。一年後にはドルの価値はさらに下がり、一五〇円台で取引されるようになった。ジャルパックではその二年後、一九八七年初頭に価格重視を前面に打ち出した第二ブランド「AVA」（名前の由来は「あなたのヴァカンス」と言われる）の販売を開始。九一年には一人一人が「したい」旅を楽しむ「アイル（I'll）」を打ち出した。以降、AGORA誌上ではおなじみのビジネスクラスで行く「ポレイア」、最少催行人数を二名とした「ポレイアデュオ」など、多様化するお客さまそれぞれのニーズに応じた旅行商品を開発して現在に至る。株式会社ジャルパック代表取締役社長の二宮秀生に、あのときとこれからのジャルパックについて語ってもらった。

「御存じのようにジャルパックという商品が生まれる前は、ビジネス需要の手配をするというのが旅行会社の役割でした。一九六四年の自由化以降は観光の需要を創出することに力を注ぎ、結果宣伝にも力を入れてきました。商品に必要なのはその時代時代の新しい提案ですから、半世紀の時を経ても基本の考え方に変わりはありません。これからもJALグループだからできる、ジャルパックだからできることを考え、国内も海外も問わず、お客さまの期待を超える旅の提供と新しい旅を追求して、付加価値を高めていきたいと思います。ジャルパックの企業理念は〈安心と品質の「いい旅、あたらしい旅」をお客さまに喜んでいただき、平和で豊かな社会づくりに貢献します。〉というものです。これをこれからの五〇年もお約束していきます」と語る。

1987年に発表された「AVA」は低価格志向の学生やサラリーマン、OLの支持を得た。

JALPAK50
1964-2014

ジャルパック50周年記念商品のパンフレット。「新しい旅」がまた始まる。

私たちの

現在は、読めない言語も瞬時に翻訳され、各国の情報がリアルタイムで携帯情報端末にまで届く。一週間後に訪れる予定のワイナリーの住所をグーグルアースで検索すれば、そこに佇む自分が得られる風景までも、手に入れることができる。

そこに何があるのか、ほとんど分からなかった一九六四年から半世紀。私たちの旅の準備は大きく変わり、求める「安心」や「満足」、「情報」も当時とは比較にならない。しかし、どんなに時代が変わってもパッケージツアーを作り上げる人間は、帰国されたすべてのお客さまが、笑顔であることを祈る。それはあの時も、これからも、同じなのだ。 A

• IATA：運賃などを決めるために各国航空会社で作っている国際航空運送協会の略称

資料：「大いなる決断」柳田邦男 講談社文庫
写真 毎日新聞社（P.108、109）
共同通信社（P.110）